Yukito NISHINAKA

# 西中千人

## そのガラスアートは、「宇宙」をリアライズするために

日本橋髙島屋１階正面ホールにて、5月31日～6月20日に展示された《一瞬に煌めく永遠～ガラスアートの瞑想空間へ》。起立する大小17点のガラスのオブジェは、リサイクルガラス（よく見ると再生前のガラス壁のディティールが残っている個所も）でできており、その事実が観る者に「地球資源の循環型社会」についての思いを触発するものともなっている。　撮影：森健児（p 96も）



特別対談

ゲスト **古藤俊一**（有人宇宙システム株式会社代表取締役）

去る5月31日、日本橋髙島屋のエントランスに表れた《一瞬に煌めく永遠～ガラスアートの瞑想空間へ》。光り輝く大小17点のオブジェが天へとのび、その根本からミストが静かに漂う神秘的な光景。見る者のイマジネーションを喚起し、はるか「宇宙」へと飛翔させるこのインスタレーションを実現したのが、ガラスアーティスト・西中千人。作家はいかにしてこの作品を構想し、その先に何を見つめるのか？ ＪＡＸＡなどで活躍する宇宙事業のエキスパート・古藤俊一氏が、西中作品と「宇宙」との関係を解き明かす。

（構成・米谷紳之介）

### 太陽と月の関係のように、アートは人の心に反射して輝くもの

**西中**　古藤さんは私に「アーティストに必要なのは世界観ではなく、宇宙観なんだ」と示唆してくれた方です。一度、膝を交えてじっくりお話をしたいと思っていました。初めてお会いしたのは10年ほど前ですよね。

**古藤**　横浜髙島屋で、たまたま西中先生の個展を見たのがご縁ですが、会場の入り口にあった《ＭＡＤＯ》というタイトルのガラスオブジェに心をわしづかみにされました。真ん中が少し透けて見え、そこを覗くと、中には星がいっぱい輝いているんですね。それはまさに私にとっ

ての宇宙でした。

**西中** 古藤さんが星に見えたのはガラスの気泡ですよね。従来のガラス作家は鋳込みの段階で、できるだけ気泡をつくらないようにします。一般的に、そのほうがきれいだとされているからです。でも私はそれが嫌でした。むしろ気泡も自分の表現として見せたかった。子どもの頃、夏になるとよく海に潜ったんですが、真っ青な海の中には無数の気泡が踊っていました。その美しさは私の原体験です。さらに夜の星空。田舎でしたから、満天の星の美しさは記憶として刷り込まれています。現在の私の工房も周囲に建物は少なく、夜は暗いので、無数の星が見えます。

そうして私の意識の底に横たわっていた宇宙への想いが、古藤さんの「この作品は宇宙だ」という言葉で目覚めた気がします。

**古藤** 私も田舎の山育ちですから、少年の頃から夜空の星を眺めるのが大好きでしたね。それが人工衛星の開発の道に進むことになった原点です。残念ながら、私は宇宙飛行士ではないので、宇宙へ出ていくことはありませんでした。しかし、気象衛星から送られてきた写真などを見るときは、自分が衛星にいて、宇宙から地球を見ているような感覚なんですね。西中先生の作品もそうです。自分が今、宇宙空間に浮かんでいるようなイメージでガラスの世界を見ることができます。

**西中** そこなんですよ。宇宙もアートもどれだけ自分のこととして捉えられるかが重要です。今は宇宙なんて自分とは関係のない、空想の世界だと考えている人が多い。アートに対しても同様で、作者は有名なのか、価格はいくらなのかという程度の関心しかない人がほとんどです。つまり、アートを身近なものとしては捉えていません。それはアートが人の心に届いていないからでもあるんですね。最近、私は、アートは夜空に浮かぶ月の光のようなものじゃないかと考えています。

**にしなか・ゆきと**
1964年和歌山県生まれ。88年星薬科大学薬学部卒業。91～94年カリフォルニア芸術大学でガラスアートと彫刻を学ぶ。98年ニシナカユキトGLASS STUDIO設立。主な受賞に97年第1回「現代ガラスの美展IN薩摩」大賞、13年「CREATIVE HACK AWARD 2013」グラフィック賞など。個展は04年以降毎年高島屋各店で開催、そのほか14年古川美術館分館 爲三郎記念館などで多数。Asian Art in London、COLLECT（ともにロンドン）、SOFA（シカゴ、ニューヨーク）など海外のアートフェアやグループ展への出品も多数。

**ことう・としかず**
1950年福岡県生まれ。75年九州大学大学院工学研究科修了、同年宇宙開発事業団（現JAXA）に入社。以来、気象衛星「ひまわり」を手始めに多数の人工衛星の開発に従事。2011年に執行役を最後にJAXAを退職、同年有人宇宙システム株式会社（JAMSS）に入社。12年より代表取締役社長（現職）。

## 「呼継」も、リサイクルガラスでの制作も、恒星の「輪廻転生」に通じるものとして

**古藤** 作り手の精神が問われるのでしょうね。近年、取り組まれている「呼継」のシリーズには西中先生の「ガラスは割れる、人は死ぬ、だからこの一瞬を生きる」というメッセージが明確に表われていますね。

**西中** 今でこそ「金継」という手法は広く知られているし、割れたり、ヒビが入ったりした器の美しさも理解されています。けれど、今から400年ほど前に、初めて「呼継」や「金継」をやったときはどうだったのか。私はそこを考えますね。桃山時代あたりに、茶人でもある武士が始めたのでしょうが、もし、お披露目のお茶席でその器が散々な評判だったら、彼は二度と使わなかっただろうと思います。ところが、居合わせた人の心に響いたのでしょうね。だから、その器が訴えかける生命の儚さや尊さは、400年経った今も人の心に響き続けているのだと思います。

**古藤** 考えてみれば、人間に限らず、この世に存在するものに「永遠」はありませんよね。宇宙は誕生して138億年ほどだと言われます。そして、地球の年齢は現在約46億歳。私はあと10億年くらいは大丈夫じゃないかと漠然と考えていますが、どうなるかは誰も分からない。いずれにしても、いつか太陽はなくなるだろうし、地球も太陽とともに爆発して消滅してしまうはずです。

**西中** 爆発後にその破片が集まり、新たな恒星が生まれるかもしれない……私はつい「呼継」と結びつけて考えてしまいます（笑）。

**古藤** まさしく「輪廻転生」ですね。そのような宇宙観を理屈ではなく、直観的に伝えるのがアートの力かもしれないですね。

**西中** 今回、日本橋髙島屋一階のエントランスに「一瞬に煌めく永遠～ガラスアートの瞑想空間へ」と題したインスタレーションを展開したのも、「循環」や「輪廻転生」について私なりに提案したかったからです。

**古藤** リサイクルガラスを使われているそうですね。

**西中** 日本耐酸壜工業※というガラス壜を製造している会社に全面的な協力を仰ぐことで実現したプロジェクトです。この会社の協力がなければ、巨大なガラスオブジェを作ることはできなかったし、展示するからには見る人に持続可能な未来について考えてもらう契機にしたかった。というのも、現在、ガラスのリサイクル率は約70%。水が大地と川と海の間を循環しているように、ガラスも再利用を繰り返しながら人間社会を循環しています。

もちろん、この作品から何を感じ、何を想像するかは見る人の自由です。古藤さんは何を感じられましたか。

**古藤** やはり宇宙ですね。大小さまざまな、まるで生命体のようなガラスが宇宙に向かって伸びようとするエネルギーを感じます。

## 「月にインスタレーションを！」宇宙をリアライズするためのアートへ

**西中** 少し初歩的なことを聞きますが、宇宙とはどこから先を言うのでしょうか。

**古藤** 実は空と宇宙の明確な境界はないんですが、一般的には空気がほとんどなくなる、地上から約100㎞先を宇宙としています。地球の半径は約6400㎞ですから、空気に覆われている層は非常に薄く、デリケートだということですね。だから、そこに暮らす人間の活動で温暖化も生じます。

**西中** 現実に宇宙から地球を見るような体験をしたら、ものの見方、考え方が変わるような気がします。

**古藤** よく言われるのは宇宙から見た地球には国境がないということですね。国と国が争うことの愚かさも見えるのでしょう。アポロ計画に参加した宇宙飛行士の多くが精神世界や宗教に目覚めたのも、彼らにしか知覚できない世界がそこにあったからだと思います。

**西中** 宇宙を体感するというのは自分の心の奥を見ることなんでしょうね。私も可能であれば宇宙に行ってみたいし、実はそこでアートを展開できないものかと本気で考えています。もっと具体的に言うと、月で何かやってみたいんです（笑）。

**古藤** いかにも西中先生らしい気宇壮大な発想ですね。

**西中** 今はすべてがバーチャライズされてしまって、リアルな手応えがどんどんなくなりつつある時代じゃないですか。あるいはインターネットによって誰もが情報を容易に手に入れられ、スマホ一つで何でもわかったような気分になれます。しかし、膨大な情報に囲まれ、バーチャルな世界に浸っているせいで、未知のものを受け入れられなくなっている。未知に対する

《MADO》 1996年　38×19×高さ52cm　ガラス、鋳造

※日本耐酸壜工業株式会社は、岐阜県大垣市で創業86年を迎えるガラス壜製造会社。現在400種類ほどのガラス壜を製造、ドリンク壜に換算すると年間約13億本を供給する。同社はガラス壜による循環型社会の実現を目指し、リサイクルをスピードアップするための独自のプロジェクトを推進している。

感性が鈍っていると言ってもいい。そして、この時代に残された最大の未知とは宇宙です。だからこそ、私はその未知なる宇宙にリアルな現実、本気の現実をぶちかまし、この時代に風穴を空けたい。

**古藤** 今そんなことを考えているアーティストはまずいないでしょう。その意味では最初に手を挙げた者勝ちですね（笑）。

《ヒカリ包む》 14.5×13.5×高さ35cm　ガラス、鋳造

《転生（てんしょう） 石激（いわばしる）》 16×12×高さ41cm　ガラス、宙吹き

**西中** そこで古藤さんにお聞きしたいんですが、実際に月にアートを展示することは可能なのでしょうか。

**古藤** すでに宇宙開発は冒険の段階からビジネスの段階へと移行しています。民間人を乗せた宇宙船が定期的に月へ行くようになるのはまだ先の話ですが、西中先生のご提案は十分可能だと思います。

《転生 荒海》 48×48×高さ19.5cm　ガラス、宙吹き

《転生 焔（ほのお）》 19.5×19.5×高さ26cm
ガラス、宙吹き

6月21日より開催される個展出品作より。
作家の代名詞である「呼継」シリーズに循環をテーマにしたオブジェも加え、全60点が出品される予定。

ミッションとしては、無人ロケットを打ち上げ、作品を収納した飛翔体を月の近くまで運び、落下させて月面に到達させる、というものになるでしょう。これくらいは現状の技術でも問題ありません。ただし、作品が壊れ、思ったような展示ができないかもしれませんが。

**西中** むしろ、そのほうがいいですね。ハプニングもアートですから（笑）。

**古藤** 問題はその資金をどうやって調達するかですね。

**西中** 資金はクラウドファンディングで幅広く集めたいですね。より多くの人に関わってもらうことが、アートと宇宙それぞれの関心を高めることになると思うからです。

アートも宇宙開発も、いつまでも閉ざされた世界で、限られた人だけのものであっていいはずはありません。このプロジェクトにはそんな状況を劇的に変える力があると信じています。

**古藤** いやあ、面白いなあ。ぜひ私にも協力させてください！

**西中千人ガラス展**
**「破天」―天をも破り、未踏の地へ**
**会期** 6月21日（水）～27日（火）
10時30分～19時30分（最終日16時まで）
会期中無休
**会場** 髙島屋日本橋店6階美術画廊・美術工芸サロン
東京都中央区日本橋2-4-1
☎03（3211）4111